

それほど、当時の五峰山光明寺は広く信仰を集めており、特に旧暦四月八日の仏生会には、「滝野の花祭」とよばれ、『参拝者の列が鬮竜灘から山上までを埋め尽くす播州随一の賑わいであった』と伝えていきます(滝野町史より)。

その参拝者に鮎を振る舞い、まつりに興をそえるためには、現在の五月初旬には鮎漁を行う必要があったと考えられます。

いづれにせよ、鬮竜灘という独特の地形と、そこで生み出された独特の漁法により、必然的に五月上旬という「日本一早い解禁日」が生み出されたようです。

左の写真のように、昭和三十年頃までは、鬮竜灘だけで一日に五十貫(約百八十八kg)以上の漁獲があったという資料も残るほど豊かな資源であった鮎も、河川の汚染が進むにつれてその数を著しく減少させました。鮎自身が水の汚れに弱い魚であるだけでなく、餌となる藻類(こけ)もまた汚濁の影響を非常に受けやすいことが原因です。

昭和五十一年から、鮎の漁獲量回復を目的に、加古川漁業協同組合による稚鮎の放流事業が進められ、現在でも、加古川水系全体で年間に六千kg程度の放流が行われています。放流事業が始められるのとはほぼ同

## 鮎の減少と放流事業

時期に、工場廃水を規制する水質汚濁防止法により川の汚れは徐々に改善され、下水道の整備が進んだことにより、現在の水質は鮎が生息できるとされる条件を満たしています(下のグラフ)。

しかし、平成十八年度の鮎の漁獲量は、加古川水系全体で一萬三千kgで、横ばいの状況が続いています(加古川漁業協同組合資料)。

水質が改善され、鮎の放流が続けられているにもかかわらず、かつての豊漁を取り戻せていない理由を、加古川漁業協同組合にうかがってみました。

## 鮎の復活を阻害する要因

加古川漁業協同組合のお話では、水質の基準は満たしていても、鮎の餌となる藻類が生息するための環境が十分ではないと考えられているようです。

その要因として、治水工事による濁り、農業排水に含まれる濁りが石に付着して、藻類の繁殖を妨げている。工場排水に含まれる色により日光の照射が妨げられ、藻類の発育を妨げている。下水処理場からの排水に含まれる窒素、リンの濃度が藻類に適していない可能性がある。

繁殖可能な水質を安定的に下回っていない。(下水道の一層の促進に



大正頃の鮎漁(加古川流域滝野歴史民俗資料館蔵)

## 鮎を守る人

## 加古川への想い



池嶋 清さん



澤野 祥二さん

### 自然に親しみ、川を大切に

### 川を大切に

組合としては、鮎以外にも、うなぎ、フナ、アマゴ、ニジマスなどを放流していますが、放流量は鮎が最も多くなっています。これは、組合員からの要望が最も多いためで、多くの人が鮎という魚に魅力を感じているためでしょう。

私たちは昔から、加古川より多くの恩恵を受けてきました。ですから、加古川の水を利用するすべての人々が自分達の川に責任を持つことが重要ではないでしょうか。

そして、子ども達には、川に触れ、水に親しむ機会をたくさん持つて欲しいと思います。そうすることで、川を大切にしようとする心が芽生え、ふるさとを大切に育まれると思います。

### 全国で唯一の

### 漁法を守る使命感

鮎は一年でその生命を終えてしまう魚(一年魚)です。懸命に命をつなぐ姿には愛おしさすら感じます。

ただし、一年魚は本来、生命力、繁殖力の強い魚です。鮎にとっての良い環境を整えば、必ず数は増えるでしょう。鮎にたくさん釣りが飛ぶ加古川に戻ること願っています。

鮎は一年でその生命を終えてしまう魚(一年魚)です。懸命に命をつなぐ姿には愛おしさすら感じます。

ただし、一年魚は本来、生命力、繁殖力の強い魚です。鮎にとっての良い環境を整えば、必ず数は増えるでしょう。鮎にたくさん釣りが飛ぶ加古川に戻ること願っています。

鮎とは、流水を遡上しようとする鮎の習性を利用して、人工につくった滝に飛びついた鮎を写真手前の仕掛け穴に落とす漁法です。全国でも鬮竜灘だけの漁法といわれています。



より、水質をさらに改善する必要がある。(山林の荒廃などにより、山地の保水力(地下水などを蓄えておく能力)が低下し、川の水量が減少しているために藻類の発育を妨げている。などの要因を指摘されています。

漁協では、放流事業のほかにも、加古川市に養殖場を設置し、そこで成熟させた親鮎を加古川で産卵させる事業にも取り組まれています。鮎が遡上できる環境(井堰の魚道など)と、成長できる環境(藻類の繁殖)の条件を整えば、鬮竜灘の鮎は復活できると考えておられます。

## 五月一日には自然を見つめて

川とは、その広い流域全体の自然環境の影響を受け、その状態を私たちに教えてくれます。そして、そこに生息する鮎は、他の魚類に比べて、水質などの変化に敏感で、河川環境悪化の影響を最も受けやすい魚といわれています。

五月一日の鮎漁の解禁を知らせるニュースが届くときに、その放流される稚鮎の量を気にかけてください。放流量が少なくなる(放流する必要がなくなる)ということは、天然の鮎がたくさん遡上してきていることを意味します。

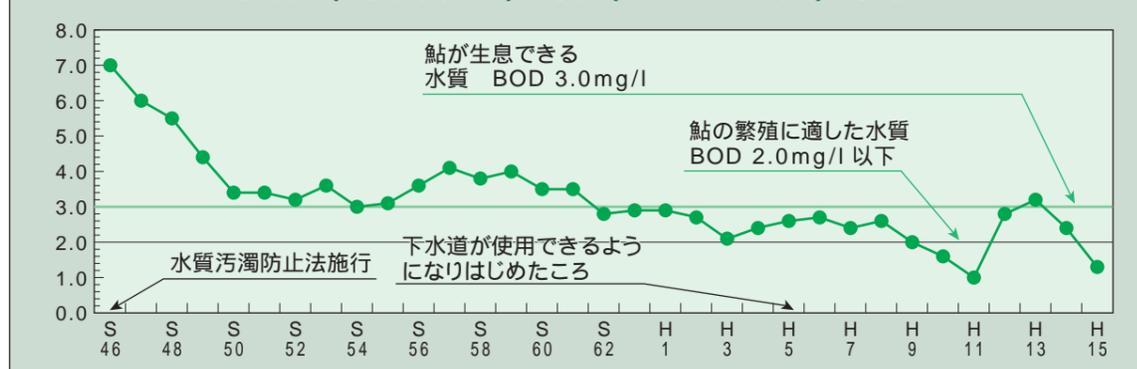
天然鮎が数多く暮らす加古川は、それを取り巻く、つまり私たちが生活している山林、農地、工業地、住宅地などが、私たち自身にとっても良好な環境に保たれているということとを反映しているのです。

加東市内の水路も小さな河川もすべては加古川に注いでいます。

鬮竜灘の「飛び鮎」。それは、加東市の自慢であり、観光資源であり、パワーの源であると同時に、私たちが次の世代へと引き継がなければならない環境の豊かさを示すための小さな覗き穴であるのかも知れません。

「日本一早い鮎漁の解禁日」を、私たち一人ひとりが「自然を見つめるための記念日」にしてはいいかがでしょうか。

加古川(西脇市板波)の水質(BOD75%値)の推移



データ: 国土交通省姫路河川国道事務所ホームページより